

熱帯の有用材 (5)

緒方 健

アフロルモシア (*Afrormosia*)

学名: *Afrormosia elata* Harms (Syn.: *Pericopsis elata* (Harms) van Meeuwen) (マメ科)

マメ科は約 600 属 12,000 種を含み、キク科、ラン科、イネ科などと並ぶ大きい科である。世界に広く分布し、木本、草本とも有用なものが少なくないが、熱帯アフリカでも多くの木材樹種が知られている。この科は主として花の性質からネムノキ亜科 (Mimosoideae)、カワラケツメイ亜科 (Caesalpinioideae)、マメ亜科 (Papilionoideae) の 3 亜科に区別されるのがふつうである。

Afrormosia 属はマメ亜科に属する樹木で、5 種からなり、いずれも熱帯アフリカに分布する。この属に近縁なのが *Pericopsis* 属で、*P. mooniana* Thw. 1 種だけからなり、これはセイロン～東南アジア～太平洋地域 (ニューギニア、ミクロネシア) にわたる広い範囲のマングローブ後脊林にみられる樹木である。van Meeuwen (1962) は分類学的に *Afrormosia* と *Pericopsis* は同属で区別する必要がないと結論し、命名規約に従って *Pericopsis* を採用した。そのため最近では *Afrormosia elata* の代わりに *Pericopsis elata* が用いられることも多い。しかし木材界では *Afrormosia* の属名がよく用いられるので、ここでもこれを採っておく。

つぎに一般名については、木材の取り引き上、学名のまま *Afrormosia* と呼ばれることが多い。そのほかではガーナ名の *Kokrodua*、アイヴォリコースト名の *Asamela* もよく使われる。地域的な名称としては、Awawai (ガーナ)、Ejen (カメルーン)、Ole (コンゴ)、Bohala (同)、Ayin (ナイジェリア) などがあるが、上記の名称にくらべ知名度は低い。

本種の分布範囲は熱帯西アフリカのアイヴォリコースト、ガーナ、ナイジェリア、カメルーン、ガボン、ザイルで、降雨林からサヴァナ林にかけて生育するが、とくに半落葉樹林に最も多い。主産地はアイヴォリコーストからガーナにかけての国境地域である。しかし今日では天然木は伐られてきわめて少なくなってきており、このまますめばいずれなくなってしまうであろうと心配されている。

樹木の形状：高さ 35～45 m、直径 0.8～1.5 m に達する高木で、20～30 m の枝下高がある。樹幹は通直、円筒形で、板根はあまり著しくないが、ときに縦溝状に高く発達することがある。樹皮ははじめ灰色～灰褐色、平滑で、のち剝片状にはげる。葉は奇数羽状複葉で、通常 7～11 枚の小葉がある。小葉は長さ 4～8 cm、幅 2～3 cm。花

OGATA, Ken: Useful Timbers in the Tropics (5) *Afrormosia*
農林水産省林業試験場木材部

序は円錐花序で、頂生する。花は帯緑白色の小花。果実はさや状で、長さ10～15 cm、幅約3 cm、中に1～4個の種子がある。

蓄積が減っていること、一方木材はチークに似て材質が優れていることから造林についての研究が行なわれはじめている。ガーナにおける実験では種子の発芽率はよく(87%)、またさしきもむつかしくないことがわかった。根粒がよく発達するので、ある程度のやせ地にも生育することが期待される。生長はあまり早くなく、ガーナでは第一年目の伸長生長は平均0.85 mであった。しかし勢いのよいものは2.1～2.7 mに達した。また8年生で、年平均直径生長は3 cmを示した。ただ実際の造林についての知識、経験はまだほとんどなく、その成否は今後に待たなければならない。若木の生長に陽光を要するので、天然林内での更新はよくない。生長に必要な条件は、年間降雨量750～2000 mm、年平均気温26°Cである。

木材の性質：心材は新鮮時にはチークに似た黄褐色だが、しだいにくすんだ褐色から暗褐色に変わり、濃色の縞をもつ。ときにやや緑色を帯びることがある。辺材は心材より少し淡色で、幅が狭い(ふつう2.5 cm以下)。木理は多少とも交錯し、リボン杻を示すこともある。肌目の精粗は中庸。気乾比重0.60～0.80、平均0.70。顕微鏡的な特徴としては、孤立管孔の接線方向の最大径は130～150 μm 、管孔の分布数は9～27/ mm^2 。放射組織は2～3列、最大高は220～350 μm で、層階配列をする(ただしリップルマークはよく注意しないとわかりにくい)。軸方向柔組織は(翼状～)連合翼状で、ルーペでも認められる。繊維長は1.1～1.5 mm。シリカは含まない。アフロモシアはしばしばチークに擬せられるが、チークのような管孔材ではなく、色がより暗色で、また材面に油状感や機械油様の臭いをもたない。強度は比重が高いだけチークより大きい。乾燥はおそいが、収縮率は低く狂いが少ない。乾燥後の寸法安定性は高い。切削加工についても問題はなく、よい仕上がりがえられる。菌、昆虫に対してはきわめて耐久性が高い。

アフロモシアが知られるようになったのは第二次大戦後で、1948年にはじめてまとまった量がガーナからKokroduaの名で輸出された。チークに匹敵する材質から国際市場での評価が高く、今日では熱帯アフリカ材の中でも最高級材のひとつとみなされ、有名なアフリカンマホガニーよりも高値で取り引きされるといふ。用途はチークと同様に家具、キャビネット、装飾壁、フローリングなどである。濡れた状態で鉄に接すると汚染が生ずるので注意を要する。

Afrormosia 属の他の種類としては *A. angolensis* Harms (マラウイ、ザンビア、ローデシアの降雨林) や *A. laxifolia* (Benth. ex Bak.) Harms (セネガル～スーダンおよびカメルーン～ザイールのサヴァナ林) があり、材は *A. elata* に似るといわれる。はじめにあげた *P. mooniana* も材は外観状 *A. elata* とほとんど同じで、近年わが国でユーラシアンチークの商用名で家具などに用いられている。